

次世代に引き継がれるあんぽ柿

～ J A ふくしま未来伊達地区 若手生産者への技術継承と、
あんぽ柿 P R 活動から生まれた絵本～

調査研究部 震災復興調査班

(文責：研究員 上田 晶子)

目次

1. はじめに
2. あんぽ柿生産・出荷再開から5年、産地復活に向けた歩み
3. 若手生産者に引き継がれるあんぽ柿生産
4. 小学生によるあんぽ柿 P R 活動から生まれた絵本『カッキーとカッキーナのゆめ』
5. おわりに

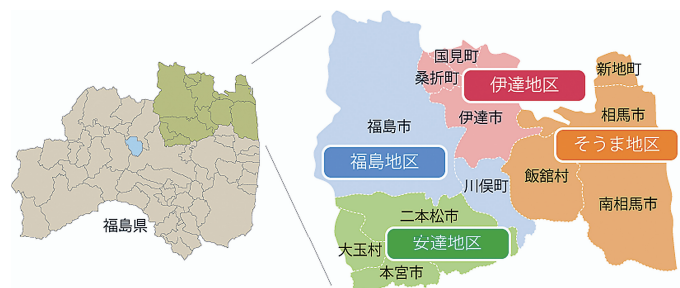
1. はじめに

東日本大震災発生から7年半が経ちました。J A ふくしま未来伊達地区管内の特産であるあんぽ柿は生産歴90余年を誇り、当地自慢の味覚です。震災後2年間の生産自粛を経て2013年から再開、2017年度は震災前の出荷量の8割まで復活しました。既に本誌No.133(2014年6月発行)、No.141(2015年10月発行)、No.149(2017年2月発行)でも報告の通り、震災直後から特産品復活に向けてJ A と生産者が一丸となって26万本の柿の木の除染に取組み、2016年度にはあんぽ柿産地振興の基幹施設「あんぽ工房みらい」が本格稼働しました。あんぽ柿は福島市と伊達市、桑折町、国見町の2市2町の全域で加工・出荷され、生産量も震災前の水準に回復しつつあります。

伊達地区のあんぽ柿生産部会では、震災直後から6年間産地復活の先頭に立ってきた穴戸里司部会長(63)がこの3月に任期を終え、副部会長だった佐藤孝一さん(63)が新部会長に就任しました。産地を元気にしようと若手後継者も就農しています。高齢化が進む中

でも、伝統の技を受け継ぎ、販売促進に向けて首都圏の消費者との交流を通して福島の味をアピールしています。

また、あんぽ柿発祥の地・伊達市梁川町五十沢地区やながわまち いさざわの小学校では、特産であるあんぽ柿を題材に学習を続けてきました。風評被害に苦しむ農家を勇気づけようと、全児童が上京してP R イベントに参加し、農家の思いを代弁しました。その活動を当時の小学校校長があんぽ柿のキャラクターを主人公にして一冊の絵本にまとめ、話題を呼んでいます。



福島県・J A ふくしま未来

(出典) J A ふくしま未来ウェブサイト
<https://www.ja-f-mirai.or.jp/about/>

今回は、あんぽ柿の生産復興の現状と若手生産者への技術継承とともに、小学生があんぽ柿のPR活動を行った経緯をテーマにした絵本『カッキーとカッキーナのゆめ』に託された夢や希望に注目し、報告します。

2. あんぽ柿生産・出荷再開から5年、産地復活に向けた歩み

J Aふくしま未来、果実専門農協、商系業者などによるあんぽ柿生産について、加工再開モデル地区を設定した2013年度は約200 tと震災前の13%だったが、その後モデル地区を拡大し出荷量も徐々に戻ってきている。2017年度は1,200 tと震災前の78%まで復活した。2018年度の目標数量は1,400 tで、震災前の出荷量の91%を予定する。

加工再開モデル地区は当初、非破壊検査(7月実施)で放射性セシウム濃度が1 kg当たり10ベクレル以下の圃場割合が80%になった大字ごとに設定した。モデル地区は2013年度の23地区から毎年拡大し、2016年度は2市2町で柿の生産実績のある108地区すべてで再開された。2017年度からは加工再開モデル地区の設定は行わずに非破壊検査を継続し、その結果に基づき圃場単位での出荷の可否を判断している。それでも一部出荷できない圃場はあり、未だ加工自粛が続いている。非破壊検査でスクリーニングレベルが超過するリスクの高い圃場が、未だ10haほど存在している。

同J Aの数又清市常務理事は「これらの圃場で伐採・改植が進めば全圃場で加工自粛が解除できる可能性が高くなる。ただ自粛解除となった場合でも、万が一に備え、安全性を確保するためには引き続き全量の非破壊検査は必要と考えている」と話す。

贈答用に不可欠であった個包装製品の出荷が2016年度から再開された。再開にあたり、あんぽ柿を個包装し、化粧箱(8個入り)に詰めあわせた製品にも対応可能な非破壊検査



J Aふくしま未来 数又清市常務理事

機を導入した。年末年始の贈答需要に応え、販路拡大や有利な販売につながることへの期待が高まっている。また、蜂屋柿の大玉も2016年度から個包装加工できるようになったことで、生産量の増大につながっている。

従来、非破壊検査は単体ごとに検査するため、一箱に平均120秒かかった。2017年度からそれを一括して計測するシステムに変更することで、計測時間が30~40秒に短縮された。これまでは繁忙期の検査場は作業が深夜に及ぶこともあったが、変更に伴い検査時間が大幅に短縮された。検査場は、あんぽ工房みらいを含め6か所に設置され、検査機はトレー製品用が33台、個包装製品用が10台稼働する。

生産が立て直される一方で、あんぽ柿の相場の回復は遅れている。福島県であんぽ柿の生産・出荷を2年間自粛している間に、他産地の出荷量が伸長したことが要因だ。震災前の2010年に干し柿(あんぽ柿含む)の生産量が全国一だった福島県は再開時の2013年に出荷量が87%も減少し、その市場を補うように長野県や山梨県の出荷量が伸びていった。

そうした中で、同J Aではあんぽ柿振興センター「あんぽ工房みらい」が2016年秋から稼働した。初年度は82 t、2017年度は116 tで販売額は2億円に達した。あんぽ工房みらいは農家の高齢化で加工作業ができなくなった柿の受け入れや、あんぽ柿を原料にした独自製品の開発を通じて施設の活用を図っている。

同JAはあんぽ柿の生産復活とともに6次化商品などの開発にも取り組む。2017年9月、同JAはあんぽ柿の6次化商品を発表した。プレミアムフルーツアイスクリーム「あんぽ柿あいす」(110ml、税込350円)はあんぽ柿の果肉の食感が残る逸品で、「柿入れ羊かん」(55g、税込250円)は香料を使わずあんぽ柿の甘さと香りを活かしたヒット商品だ。JAの農産物直売所「みらい百彩館んめ〜べ」などで販売している。またタルトなど、あんぽ柿を使った新銘菓の開発も進んでいる。

あんぽ工房みらいであんぽ柿の加工を行うのは10月から翌年の3月までの半年間である。夏季の3か月間に施設を桃の選果場として稼働させれば、職員の長期雇用が可能となる。業務の効率化と同時に、地域住民の雇用対策の面でもさらなる活用が期待されている。

3. 若手生産者に引き継がれるあんぽ柿生産

(1) 「後継者を育て、早く震災前の生産規模に戻したい」

今年3月、宍戸里司前部会長の後を受け、佐藤孝一さんがあんぽ柿生産部会長に就任した。伊達市^{りょうぜんまち}霊山町で桃やキュウリ、水稲などを専業で営み、柿(蜂屋柿^{はちやがき})60aを栽培する。

霊山町のあんぽ柿生産は3年間自粛され、2014年に加工再開モデル地区となり再開した。町内の圃場に放射性物質が飛散し、局地的に空間放射線量が高くなる場所が残ったためである。原料柿については、今でも2市2町から移動することができない。

佐藤部会長は「後継者の問題があり、受け継ぐ人が少なくなる不安があるが、あんぽ工房みらいができて、生産量は確保できるようになった。今の段階では現状維持だが、あんぽ柿づくりの技術をつないであんぽ柿の伝統を次代に引き継いでいきたい」と抱負を語る。

2018年2月には、栽培技術の継承と産地体



JAふくしま未来
あんぽ柿生産部会 佐藤孝一部会長

制の強化を目的として、伊達地区の若手生産者や経験年数3年未満の営農指導員を対象に、JAが委嘱する「農の達人」による柿の剪定講習会を開いた。当時、あんぽ柿生産部会長だった宍戸さんが達人として実技を交えながら指導し、生産技術とともに、あんぽ柿を大切にする思いを伝えた。

(2) 「先輩たちがつくってきた伝統を守っていききたい」

国見町の阿部^{かおる}郁さん(28)は、震災直後の2012年春に就農した。桃2ha、リンゴ15a、水稲30a、柿は^{ひらたわなし}平核無、^{とねわせ}蜂屋柿、刀根早生(渋抜き用)合わせて30aを栽培する。祖父と父との家族経営で、果樹農家の3代目である。

就農を決断した理由の一つは、震災で実家の経営が落ち込んでしまったことだった。農業高校から福島県の農業短期大学校に進学、卒業後は福島市飯坂町の観光果樹園で研修し、接客を学んでいた。その1年目に東日本大震災に遭った。生まれ育った国見町の果実販売が落ち込んでいる状態を見て、地域を元気にしたいという気持ちが高まった。同時に家業の果実販売も風評被害で個人贈答用が減少し、家族も危機感を募らせていた。

長男として生まれた阿部さんは、農業一筋に歩む父と祖父の姿を見て育った。祖父の代



果樹農家 阿部郁氏

から始めたあんぽ柿が加工自粛となり、作っても売れるかどうか見込みが立たない状況で、父や祖父は農業の継続を悲観した。

それでも阿部さんは「自分自身は農家を継ごうという意識が高く、やる気満々だった。父も未だ40歳代と若かったので再開する見込みがあるだろうと考えた」と当時を振り返る。

国見町は震災後3年目から加工再開モデル地区となった。国見町には若手農業者（20～30歳代）が20人ほどおり、町の農業会議所の青年部に所属する阿部さんだが、「若い人が少なくなり、生産する人がいないと畑が荒れてくる。10年先の地域をどう守っていくかが、後継者仲間との話題になる」と話す。こうしたことから、遊休農地を引き受けて経営を拡大し、例えばシルバー人材の雇用も選択肢の一つと考え、将来を見据える。

顧客も徐々に戻りつつある。東京など首都圏の大消費地での販売に出向くという阿部さんは「お客さんと直に話をして、おいしいものを食べてもらって安心してもらうのが一番だと思う」と積極的に消費者との交流を図る。

阿部さんは、ハイテクな機械を備えたあんぽ工房みらいが高齢の生産者の意欲を高めている点に意義を感じている。同時に、「伝統産地を維持していくには、昔ながらのあんぽ柿づくりの技術・作法を守っていくことが欠かせない」と、伝統の継承にも意欲的だ。

4. 小学生によるあんぽ柿PR活動から生まれた絵本『カッキーとカッキーナのゆめ』

伊達市立五十沢小学校の児童は、「総合的な学習の時間」の中であんぽ柿について学び、東日本大震災後、地元のあんぽ柿づくりを応援しようとPR活動に取り組んだ。

同小学校では学校行事として「あんぽ祭り」を行ってきた。毎年地域の人も協力して柿をむき、小学校の燻蒸箱で硫黄燻蒸して渡り廊下に干していた。出来上がったあんぽ柿は袋詰めし、町内の老人ホームに配っていたのだが、加工自粛により中止となっていた。

震災から2年目の2012年4月、郡山市から木村京子さんが校長として同校に赴任した。現在、郡山市の社会教育指導員を務める木村さんは「あんぽ柿の里といわれた地域が加工自粛の時期に、自分は来た。児童の多くの家庭があんぽ柿の生産農家で、子どもたちは家を手伝い、あんぽ柿に誇りを持っていたことが印象的だった」と話す。

木村さんは地域を元気にしたいと考え、学習活動の一環で、あんぽ柿の製造開発と普及に貢献した佐藤昌一^{まさいち}氏（1908－1944・後述）の、県南にある^{はなわまち}塙町の生家を訪問し、お墓参りをした。さらにあんぽ柿の学習を続け、2013年12月には、東京国際フォーラムで開催された消費者との交流イベント「みんな笑顔で、「福」満開！ふくしま大交流フェア」（福島県・東京都共催）に参加する機会に恵まれた。このイベントでは全校児童38名が参加し、壇上で学習成果を発表し、あんぽ柿の販売を手伝い、福島の元気と魅力を発信した。地域住民も大応援団を結成し、大型バスで上京した。木村さんは地域を応援する子どもたちの活動記録を残したいと2016年5月、あんぽ柿のキャラクターを主人公にした絵本200部を自費制作した。絵本の主人公は蜂屋柿をモチーフにした男の子「カッキー」と、平核無の女



「ふくしま大交流フェア」に参加した
伊達市立五十沢小学校の児童と応援団
(2013年12月23日撮影・曳地一夫氏提供)

の子「カッキーナ」で、子どもたちの発案をもとに誕生した。『カッキーとカッキーナのゆめ』は、柿があんぽ柿になるまでの過程や、震災後の産地の苦悩、小学生によるあんぽ柿のPR活動について描いた絵本である。

この絵本に感激した宍戸さんが書籍化と増刷を提案し、2017年4月にハードカバーで出版された。絵本は五十沢地区260戸に配付したほか、JAふくしま未来の福島・伊達・安達・そうま地区の全店舗、伊達管内の小・中学校や幼稚園・保育所、図書館や交流館（公民館）などの公共施設に配付された。さらに病院・歯科医院など医療機関にも絵本を贈呈した。

伊達市教育委員会の原好則課長は「子どもたちに地域をよく知ってほしいという思いから、子どもたちの目に触れる所に置かせていただいた」と、絵本の活用をすすめている。

伊達市では、地元TV局・福島放送（FKB）主催の市町村対抗CMコンテスト「ふくしまの元気！応援CM大賞2017」にあんぽ柿を題材にCMを制作、出品したところ、見事大賞に輝いた。五十沢地区の小学生もあんぽ柿役で出演し、2018年度もFKBで放映中である。

絵本は、復興支援キリン絆プロジェクトの支援を受け、宍戸さんが会長を務める「がんばっぺ!!あんぽ柿協議会」が発行した。また、



絵本を手にする（写真左から）JAふくしま未来あんぽ柿生産部会 宍戸里司前部長、旧伊達市立五十沢小学校 木村京子元校長、曳地一夫氏

同協議会は「伊達のあんぽ柿」のブランド名で地理的表示保護制度（GI）認証の申請を進め、2018年度中には認可される見込みという。

ところで、五十沢地区はどのような経緯であんぽ柿の里となったのだろうか。あんぽ柿生産農家で郷土史にも詳しい曳地一夫さん（60）は「そもそも五十沢はあんぽ柿一筋で走ってきたのではなく、当時の村や農家が抱えていた問題が背景にあった」と語る。

あんぽ柿は大正年間、旧伊達郡五十沢村で開発された。当時、伊達は全国有数の養蚕地帯だったが、生糸市場が大暴落し、養蚕が斜陽化すると、村も農家も大打撃を受けた。そこで村の有力者たちが「牡丹餅会」を結成し、養蚕に代わる新しい農産物の模索を始めた。その一つがあんぽ柿だった。1922（大正11）年にあんぽ柿の原型ともいえる柿の硫黄燻蒸技術が生まれ、翌年12月に東京の神田市場に柿を出荷すると好評で高値がついた。1929（昭和4）年に五十沢農業公民学校に赴任した農業教師・佐藤昌一氏が硫黄燻蒸製法を体系的に確立してからは、品質は格段に向上した。あんぽ柿の生産技術は、伊達はもとより全国各地に広く普及することになる。

五十沢のあんぽ柿は、戦前からブランドを確立していた。そして戦後活発になったあん

ぼ柿生産や果樹栽培が安定した収入源となり、出稼ぎをしなくて済む農家の経済状態をつくったのだ。それがあんぼ柿発祥の地としての自負や誇りにつながり、今日も五十沢地区の生産者や地域の人々を特産品復活へと突き動かしている。

5. おわりに

伊達特産のあんぼ柿は、2022年に100周年を迎えます。長い歴史の中で生産できなかったのは、太平洋戦争開戦から終戦後の混乱による出荷中断（1941～47年）と、震災後の2011年から2年間の自粛期間だけです。

2018年度のあんぼ柿の出荷量は、震災前の9割まで回復の見込みです。加工自粛の全面解除や非破壊検査を継続するか否かといった課題も残ります。高齢化や後継者不足による農家数の減少など、技術継承への不安も高まっています。その中で意欲ある若手生産者の存在は産地を元気づけています。

伊達市立五十沢小学校は2017年3月、143年の歴史に幕を下ろしました。昭和初期には300人を超えた児童数は、閉校時には23人になりました。築23年、3階建ての小学校の跡地利用については未定です。五十沢出身の宍戸さんは「地域の文化を守るため、あんぼ柿づくりの体験施設として『あんぼ柿ミュージアム』にするといったアイデアも浮かんでいます」と、地域活性化に期待を寄せます。

地域の特産品に誇りを持ち、東京でのPR活動を通して自発的に産地復興に協力した子どもたちも、現在は中学生や高校生になっています。彼らが成長しても、絵本に託された子どもたちの思いは引き継がれ、地域の産業と文化を守っていくことでしょう。

「カッキーとカッキーナ」のイラストは、五十沢地区の入り口にあたる交差点に掲げられた「あんぼ柿の里・五十沢」の看板にも描かれ、訪れる人を温かく迎え入れています。

*本レポートは2018年8月7～8日に行った現地調査に基づいて、作成したものです。

（謝辞）

大変お忙しいところを聴き取り調査にご協力いただき、資料のご提供をいただきました。JAふくしま未来 数又清市常務理事はじめJA役職員の皆様、あんぼ柿生産部会 佐藤孝一部会長、宍戸里司前部会長、曳地一夫氏、阿部郁氏はじめ管内生産者の皆様、郡山市教育委員会 木村京子社会教育指導員、伊達市教育委員会 原好則参事兼課長、関係者の皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

（参考資料）

- ・JAふくしま未来ウェブサイト
<http://ja-f-mirai.or.jp/>
 - ・伊達市ウェブサイト
<http://www.city.fukushima-date.lg.jp/>
 - ・五十沢自治会ウェブサイト
<http://www.isazawa.jp/>
 - ・伊達市立五十沢小学校ウェブサイト
<http://www3.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=0710090>
 - ・公式YouTubeチャンネル 福島県伊達市
<https://www.youtube.com/channel/UCi50tVtuQo2mW8YMzN4xHbQ>
 - ・国見町ウェブサイト
<http://www.town.kunimi.fukushima.jp/>
 - ・粕谷ひろみ作、原田くるみ絵、木村京子原案・監修『カッキーとカッキーナのゆめ』がんばっぺ!!あんぼ柿協議会・2017年4月発行
 - ・佐藤昌一『硫黄燻蒸五十沢アムボ柿：製造・利用・販売』五十沢農業公民学校・1933年発行
- （日本農業新聞関連記事）
- ・「PR絵本を教委に贈呈 福島県あんぼ柿協」2017年8月12日（火）ワイド2東北
 - ・「あんぼ柿6次化 新商品お披露目 JAふくしま未来」2017年9月3日（日）エリア東北
 - ・「あんぼ柿 若手に継承 態勢づくり狙う JAふくしま未来伊達地区「農の達人」剪定講習会」2018年2月14日（水）ワイド2東北